

愛知目標の中間評価を踏まえた
生物多様性主流化施策に関する
各セクターからの報告

① ビジネスセクター

ビジネスセクターにおける【取組の成果】

- 生物多様性民間参画パートナーシップの会員の増加、
生物多様性を経営理念等に盛り込んでいる事業者の増加など、
事業者の取組は着実に進展
- 社員による植樹など社会貢献活動のみならず、
木材調達基準の設定など**本業との関連性が高い取組も増加**
- 一部の事業者団体においても、業界の**行動指針**の作成、
中小事業者向け**ガイドブック**の作成などの取組を実施

ビジネスセクターにおける【課題】

- サプライチェーン全体での取組や
トレーサビリティの確保が不十分
- 定量的効果を把握するのが難しいため、
効果を社内外に説明するのが困難
- 中小事業者や事業者団体の取組が遅れている
- 行政による主流化の取組の効果が不十分で、
消費者の認知に繋がっていない

ビジネスセクターにおける【取組の方向性】

- 事業者は、民間参画ガイドライン等を参考に、**サプライチェーン全体での取組を推進**
- 事業者団体は、業界の行動指針や事例集の作成、研修会の実施など、**所属団体の取組を後押し**
- 行政は、消費者の理解を広める主流化を推進するほか、取組が遅れている中小事業者や事業者団体を対象とした**シンポジウムやモデル事業等により後押し**

ビジネスセクターにおける【今後の取組】

●自分たちで行う取り組み

- ・ **サプライチェーン全体**で行動指針・事例集の作成、研修実施
- ・ **中小事業者や事業者団体を対象**としたシンポジウムやモデル事業の実施

●他セクターと連携し、みんなで行う取組み

- ・ 全国ミーティングやアクション大賞の機会を有効に、**マッチングの機会を創出**
- ・ 「**にじゅうまるプロジェクト**」への積極的な登録への呼びかけ
- ・ 観光産業と連携し、**生物多様性における都市と地域とのつながりを結ぶ取組みの推進**

②市民団体セクター

市民団体セクターにおける【取組の成果】

- **暮らしの基盤、日常生活の取組**として広がってきた。
- 生物多様性や愛知ターゲットを**議論**することが増えた。
- 行政・自治体・企業との**つなぎ役**を果たしてきた。
- **国際会議とお茶の間をつないでいる。**
国際会議に行ったことないという市民が自分ごと化する取組をし、一般市民が国際会議で様々な提言をする支援を行っている。

市民団体セクターにおける【課題】

- 事業継続性は、裏を返せば**一人に負荷がかかる構造／人材不足**。
- 広く国民一般に呼び掛けるのではなく、一緒に組める人、実際にこの問題を実感している人に**細やかに伝えていかないと、主流化に繋がらない**。
- 生物多様性という言葉を知ってもらう＝主流化と言っていいのだろうか。お金がないのであれば、広く国民一般ではなく、**ターゲットに絞ったツール開発**が必要なのではないか。今あるツールは、当初作った意図を十分に活かしてきていないと思う。
- **国民運動化にするには予算が足りない**。

市民団体セクターにおける【強み】

- **アメーバー的な役割で連携先を増やすことができる**
潤滑油の役割が増えていて、その役割を果たすことができる。
- 人々の暮らしや文化的側面からのアプローチを実施。
保全ではなく、持続可能な利用からのアプローチ。
- face to face による**きめ細やかな活動をし、
人脈を獲得**できる。
- 担当者が変わらず、**ずっと事業継続**できる。
- **堂々とえこひいき**ができる

市民団体セクターにおける【今後の取組】

■ 自分たちで行う取組み

- ・ **地域のキーパーソン**の巻き込み
- ・ 自治体などの**取組の評価**
- ・ 失ったもの、食べられなくなったものの**リスト化**
- ・ **ネガティブ**なことをうまく活用して訴求（ウナギパニック）
- ・ **このままじゃヤバい**キャンペーン

■ 他セクターと連携し、みんなで行う取組み

- ・ 新しい手法の提案など、**行政への影響、刺激の提供**
- ・ 戦略づくりの**コーディネート**
- ・ 行政の取組の**地域での受け皿**に
（地域の昔ながらのネットワーク・仕組みを活用）
- ・ 場を持っているセクター（教育・展示施設など）に、**勉強会・体験プログラムを提供**
- ・ **他セクターの本音を聞く場**をUNDB-Jに提供してもらうことにより連携

③教育展示施設セクター

教育展示施設セクターにおける【取組の成果】

- 絶滅危惧種の域外保全事業等を、加盟施設が連携して取り組むなど、**生物多様性に取り組むネットワークの構築が進んだ。**
環境省と基本協定書を締結した。
- 絶滅危惧種の域外保全事業が連携事業に認定されたり、「生物多様性の本箱」の100冊を各図書館で持ち回りの展示するなど、**UNDB-Jと連携した取組を推進中。**
- 生物多様性を**理解しやすい施設の展示設計**を行ったり、人と自然のつながりがわかる**教材作りなどの工夫**を行っている。
- 企業が社会貢献として生物多様性にCSRとして取り組むようになった。

教育展示施設セクターにおける【課題】

- 取組を実施したくても、**資金不足**が課題。
- **プロデューサー不在**による運動には限界がある。
普及啓発は広報に長けたプロデューサーが必要。
- 施設の取組は、**うまくリレーができていないのが課題**。
今は人の回転も速く、知識、継続性、永続性が続かないのが
悩み。また指定管理者制度では発注者側と管理者側が
思いを共有することが重要。

教育展示施設セクターにおける【強み】

- **フィールドがあり、そこには利用者がいる。**
場を持っているということは、例えば研究機関で出来ないような域外保全などの取組も可能。また利用者がいるということは、MY行動宣言を配布し回収するなどの取組も可能。
- **説明できる人がいて、素材がある。**
- **文化との関わりの中で、生物多様性を訴求できる**
MLA連携、Museum（ミュージアム）・Library（図書館）
・ Archives（文書館）も。
- **絶滅危惧種の保全について、**
国の取組を補完する役割を持っている。

教育展示施設セクターにおける【今後の取組】

■自分たちで行う取組み

- ・多様性に興味をもってもらえる**キャッチコピー・キーワードの開発**
- ・**社会現象化**するために、映像（映画）や小説を制作（プロデュース）
- ・**場所がある**ことを活用（図書館利用年間3億人）
- ・**リピーター**へのアプローチ

■他セクターと連携し、みんなで行う取組み

- ・**地元依存型の教育プログラム**を出前授業
- ・**生物多様性.com**ポータルサイトの活用（情報交流）
- ・**展示→学習→活動→展示…**の無限サイクル
- ・**展示→学習→活動**サイクルのパーツをつなぐ**“のりしろ”**として**UNDB-Jと連携**

④ユースセクター

ユースセクターにおける【取組の成果】

- COP10での「がけっぷちの生物多様性」キャンペーンで SNSを活用し、**学生100人で生物多様性の政策を提言**
- 各地大学の環境サークルなどが、活動の拠点になり、**里山保全、普及啓発など多様な活動を実施**
- **生物多様性わかもの白書を作成し、**
若者の活動の現状を把握
- 活動を最初は理解していなかった人も、
活動に参加することで喜んでもらうことができ、
ネットワークが広がった

ユースセクターにおける【課題】

- 義務でやると続かないので、いかに「楽しい」と思って続けることができるか。
その視点を持って**続けることが難しい**
- 人の入れ替わりが激しく、**後継者がいない、ノウハウの蓄積が難しい**
- 自分の周りの興味のある人や同じ学科の人ばかりの参加となりがち。子ども達や近隣の人にも参加してほしいが、**広報が難しい**
- 環境分野を学んでも、**就職につながらない。**
学んだ人が活かせる仕事が少ない

ユースセクターにおける【強み】

- **将来を担う世代**であり、伸びしろが一番ある世代
- 学生や若者が団体として行動すると、**メディアへのアピール力がある**
- SNSなど新しいツールを活かして、**瞬間風速を高めた活動**をすることができる。
- 現状の地域保全是、リタイヤ組など年配者が多く、**若者は地域に歓迎され、入りやすい**
- 学生/若者だからこそ、**思い切ったことができる**

ユースセクターにおける【今後の取組】

■ 自分たちで行う取組み

- ・ ユースの世代ならではの、**「続けられる取組み」**の開発
ex.解体しんしょ…魚の解体と魚類の多様性波及
山林でのオトナの秘密基地づくり
生物多様性「駅弁」認定事業
- ・ 参加したくなる、**実は多様性と関係ある取組み**の開発

■ 他セクターと連携し、みんなで行う取組み

- ・ 他セクターと**“主体的に”**連携し、つながりを創設。
- ・ 生物多様性の運動の枠組みの中での大きな**盛り上がりの演出。**

⑤自治体セクター

自治体セクターにおける【取組の成果】

- COP10後、**生物多様性の活動に対する理解が深まった。**
- 人の手を加える里山など二次的自然を保全・再生し、
地域づくりにつなげていこうという機運が、
農林水産業分野で生まれつつある。
- 地域戦略策定に通じて、**生物多様性に関する共感やネットワーク**が生まれ、
これまでの環境保全の取組も、生物多様性保全であるとの認識が広がった。
- COP10以降、**生物多様性を扱う専門部署**が各地の自治体にできている。
今まで「生物多様性担当者様」と文書を出しても担当者に辿りつかない
こともあったが、現在は担当課長までわかる。この動きによって
担当者同士が顔を合わせる地域の協議会を形成することができた。

自治体セクターにおける【課題】

- **主流化をどう評価していくのかが課題**
自然相手の取組なので、結果がすぐに出ない。
- レッドリストの更新などは、**大規模な生物調査を、しかも長い時間をかけて実施**する必要があるが、体制の構築が課題。
- 人口減少、高齢化が進む中、**地域と保全の後継者問題が課題**／**里山や山林の荒廃**。

自治体セクターにおける【強み】

- **自治体の役割は、旗振り役・コーディネーター。**
地域全体で取組を推進する際、一緒にやろうと声掛けをするのは、企業とNPO間直接より、自治体から声をかけた方が団体は受けやすい。
- **基礎自治体は、具体的な土地に直接関わることができる。**
地権者もすぐに調べることができる。
緑地保全を行おうと思った場合、地権者の元へ出向いて、税金免除の制度や買取の制度などを直接説明できるのが基礎自治体の強み。
- **交付金事業や税が、最初の後押しになる**
具体的な予算があるから、それが取組の最初の後押しになる。

自治体セクターにおける【今後の取組】

■ 自分たちで行う取組み

- ・ まず、連携の**場づくり**
- ・ **組織内の横連携**の構築・強化
- ・ ゆるやかな**規制**

■ 他セクターと連携し、みんなで行う取組み

- ・ 生物多様性に係る**賞、認定の創設**
- ・ 省庁連携も含めた**鳥獣害対策との連携**
- ・ 生物多様性に係る**キラーコンテンツのない自治体の啓発**
- ・ **教育、学校との連携**
- ・ **生物多様性と自治体の課題を結びつける語り手として**
UNDB-Jと連携